

ロレンス・ダレル、ロドスの日々

川野 美智子

〔抄録〕

ヒマラヤの麓で生まれ、イギリスでの教育を途中で放棄したロレンス・ダレルは、ギリシアのコルフやエジプトを放浪したのちエジプトで職を得る。折りしも第二次大戦が峠を越し、1945年春に占領軍の広報官としてロドス入りをしたダレルは、この地で輝かしい陽光とエーゲ海の岩山、透明な蒼海を楽しみながら親しい友人たちと愛する女性とともにこの世の楽園を享受し、その心情を書簡と詩と1冊の紀行の書に封じ込める。

この地で彼は『アレクサンドリア四部作』の第一作 *Justine* を書き始め、またクレタ島の迷路を舞台とする *Cefalû* を完成した。ダレル文学の温床ともいえるこの時期、彼は島に対する思いを込めた詩情あふれるエッセイを書きながら、島に残される戦争の傷跡に心を痛める。それを「ヨーロッパの良心の悲劇」と観ずるダレルは、まさに20世紀を代表する作家のひとりであった。

キーワード ロレンス・ダレル、ギリシア、ロドスの人と自然、第二次大戦後の世界

1. 書簡から

インドに生まれイギリスに背を向け、家族ともどもイオニア諸島北端のコルフ島で温暖な風土と美しい風景を満喫した青春の *Lawrence Durrell* (1912-1990) は、第二次大戦の勃発した1939年帰英した母と兄弟に別れを告げ、妻ナンシーとともにアテネに赴き、ペロポネソス半島に教師の職を得た。1941年ドイツ軍のギリシア侵入の脅威に、ダレル夫妻は生後3ヶ月の娘ペネロピを伴いクレタ島へ、さらに海路アレクサンドリアに逃れた。ダレルはカイロの英国大使館に職を得るが、ここにもロンメル將軍率いるドイツ軍が迫ることとなり、ナンシーは娘とともにパレスチナに避難する。ナンシーは以後ついにダレルの許に戻ることはなかった。

1945年ダレルはやがて第二の妻となる *Eve Cohen* とともにロドス島に入る。紀元前12世紀すでにドリリス人が住み着き、ホメロスの詩にも歌われた古代都市リンドス、イアリソス、カミ

ロス三大遺跡が今も健在な、ドデカニサ諸島最大の島である。北端のロドス市は、新しいと言ってもその建設は紀元前408年、以来東西交易の中心地として栄え、「海のシルクロード」も近くを通る。ローマ帝国の同盟国としての時代、東ローマ帝国の傘下に入った時代、めまぐるしく支配者が入れ替わった中世後期、エルサレムからのヨハネ騎士団の支配時代、トルコ軍による占領時代、20世紀に入ってはイタリア軍の占領時代の後、第二次大戦下のドイツ軍侵攻、そしてようやく島がギリシア人の手に戻ったのは1947年であった。

ダレルがロドス島に滞留した1945年から47年、この島は戦後の空白の期間としてイギリスの統治下にあった。ダレルはロドス市に本部をもつ英国政府の Public Information Officer の任に就き、三ヶ国語の新聞発行をはじめさまざまな情宣活動を行うこととなった。ダレルがイヴとともに落ち着いたのは、ロドス市の風光明媚なマンガラキ海岸に近いヴィラ・クレオピュラスで、広いモスリムの墓地の一角にあるこじんまりした住まいである。役所勤め以外の自由時には二人は広い庭に影を落とす巨大なスズカケの樹の下で時を過ごすことが多かったようだ。

大戦の重苦しい暗雲から開放され、死者の国エジプトから逃れ、再びギリシアの燦爛と輝く陽光の下に身をおくことは、ダレルにとって大きな喜びであった。最初、英国海軍将校として王立ギリシア海軍の補佐に当たっていた John Leatham はダレルがアレクサンドリアから到着したときのピンクカードを保存しており、その後もしばしばダレルのヴィラに集う仲間たちの気の置けないパーティに参加して思い出のエッセイを残している⁽¹⁾。その中で Larry はしばしばその2年間は「わが人生でもっとも幸福であった2年間」であったと繰り返している。一つにはダレルが当時英国陸軍に出向中の外務省役人であり、軍のジープやドイツ軍のフォルクスワーゲンを自由に使えたため、戦後間もない時期に余人にはできないほど自由にロドス島の中を動き回り、ロドスをよりよく知ることができたためである。また先に一市井人として暮らしたコルフで、ダレルがギリシアを、その土地を、その住人を、その言語を、文化と習慣を永続的な愛で知ったように、このたびは背後に大英帝国の栄光を担っていたことは事実だが、彼のギリシアへの愛がロドスの生活をより光輝あるものとしたのであった。

ダレルは、ロドスの第一印象を Gwynne Williams あての書簡の中に残している⁽²⁾。彼はわくわくする気持ちを抑え、アレクサンドリアからエーゲ海へと向かった。ノルウェイの水兵たちとともに2日間船で過ごし、美しいカルパソスの島を過ぎた。「説明することさえそれをだめにしてしまいそうなわがミコノスの夢」が実現したのだ。彼らは上陸早々、身ぎれいで礼儀正しい10人の子供たちに町を案内された。暖かく香る朝の町はルソーの絵のようで、港の周りはピンクや青や黄色、純白の家々が立ち並んでいた。子供たちはたくみにドイツ軍の地雷原を抜けて眩い灼熱の海岸へと導いてくれた。次に皆は黙々と丘に登り、杏の果樹園の中の大きなオリーブの木の下に寝そべった。子供たちは新来の客を囲んで輪になって座り、ドルイドのように歌った。「その情景は言葉に尽くせぬほど清らかで純粋で、生気を与えてくれるものでした」⁽³⁾とダレルは書いている。ダレルが子供たちにチップを与えようとするると彼らは憤り、村

の驚くほど皺のよった老人たちはダレルたちを招じ入れてお茶をご馳走しようとした。イヴは嬉し涙にくれた。この地では食べ物は貧寒だが、ダレルたちはホテルでありあまるほどの果物を前にする。そしてダレルは次のような言葉で手紙を締めくくる。

6時に緑の海で水浴。草地を駆けます。陽光はアポロの鞭のようです。ただここには軍人が多すぎます。彼らの酒保とそれに荒っぽいスポーツとにせものの口髭が多すぎます。それ以外は天国です⁽⁴⁾。

また別の手紙でいう。

ああその青さといったら。リンドスは驚くほど青い海の輪の周りのきらめく雲母からできた町のようなです⁽⁵⁾。

ギリシア…………その沈黙が、世界の果ての永遠の流動が何を消し去り、洗い流してくれるか、あなたにはわかって頂けないでしょう⁽⁶⁾。

しかしダレルはこの天国の至福に酔いしれてばかりいるわけには行かなかった。46年4月 T. S. Eliot にあてた書簡では、現実的な彼の苦しみと願いが表れている。ダレルの第二詩集『都市、平原、人々』の出版をフェイバー社に依頼し契約に向かったことへの感謝と同時に、職探しの過程で大勢の人が自分と同じく仕事を探しており、自分のやってきた広報活動のためギリシアに人が集まり、貧しい教師の市場価値が下がった、と自嘲的にコメントしている。ダレルはそれまで住んでいたエジプトへの反発、イギリスへの嫌悪にも触れ、すでに知遇を得ていたヘンリー・ミラーの影響もあって、ロドス島の「性の過剰」について好意的に言及する。

・・・したがって人が性の自由を享受できるのはいわばこのみです。そして芸術や神や得体の知れないものに献身できるのは、全世界をエロスにすることのできるのは、ここだけです。しかしそのエロスは、瞑想の渴望、真の聖書的な愛への熱望なのです⁽⁷⁾。

ダレルはまた、ロドスでの多忙な勤務が作家に必要な孤独を自分に与えてくれないことをかちながらも、何とか自分の「死者の書」を回復しようと努めていることを告白している⁽⁸⁾。これは恐らく『アレクサンドリア4部作』の第一巻がすでに心の中に醸成されつつあり、第一稿を書き始めていたことを示すのであろう⁽⁹⁾。

そしてこのロドスに住んだ2年間に、彼は3巻のギリシア賛歌というべき書を完成している。一はコルフの風景と島の霊へのガイドである *Prospero's Cell* であり、二はそのプロスペロを

ペルソナとしてもつ詩集 *Cities, Plains, People* であり、三はクレタの迷路を契機に神秘的な探究をテーマとする小説 *Cefalû* であった。美しい風景の中で“*I'm happy.*”と繰り返しながら、ダレルはギリシアの地霊から受けた真の文学へのインスピレーションを着実に作品化していったことが分かる。

2. 詩の制作

ロドス在住の初期に出版された第一詩集 *Cities, Plains, People* のなかにはロドスに言及した詩は含まれない。しかし *Collected Poems* (1957) で次に置かれた詩は‘*In the Garden: Villa Cleobolus*’である。ダレルとイヴが仮寓した小さな住まいの庭は、前述したとおり広大なモスリムの古い墓地の一角で、松の木と西洋夾竹桃の交じり合った木立がこの家の片側から伸びている。家のすぐそばにはコルク樫の木が立っていて、静かな家をこすり壁に傷をつけるほどである。ツグミの声がはっきりと葉群から届く。ダレルと仲間たちの団欒のあとでもあろうか、珊瑚色の手をしたお手伝いの娘はろうそくを手で囲って金色の葉に覆われた小道を歩む。本や灰皿を集めて灯のともった家の方へ、ひと気のない暗闇の外れから馴染んだテーブルと木と椅子まで、隣家の庭から古い蓄音機に乗って聞こえてくるフーガのうろ覚えのメロディを口ずさみながら。この情景は後にロドスについて書かれた *Reflections on a Marine Venus* の中の1章に保存されている。

And you think : if given once
Authority over the word
Then how to capture, praise or measure
The full round of this simple garden,
All its nonchalance at being
How to adopt and raise its pleasure? ⁽¹⁰⁾
そして考えてもごらん、もしその言葉に
いったん権威が与えられるなら
この素朴な庭の全周を
その存在への無関心のすべてを
いかに捉え、賛美し、測るかを。
その喜びをいかにわがものとし、高めるかを。

詩作に逸る若いダレルの用いるイメージは、この庭と傍らのワイン、楽しき近隣と彩られた陶器に盛られた果物の生のままの香りである。これらはリアルでありながら詩人のロマンティック

に昂揚した詩心を象徴するものに他ならない。そしてこの甘美さの中にある痛み。それは「自己を求める宝探し」(this treasure hunt of selves)なのだが、詩人はこれを「形式という愛しい小部屋」(the loving chamber of the form)つまり「詩」の中に閉じ込め囲い込もうと苦闘する決意で詩を締めくくる。

1948年に書かれ、公にされた連詩“Anecdotes”には‘At Rhodes’または‘In Rhodes’と題した詩が4篇収められている。第三の詩‘At Rhodes’は、具象的な五月の島の風景とあどけない兄妹のしぐさが詩人の心にもたらす至福のひとつときを、さりげなくしかも克明に描いている。詩人は自分の詩人としての営為をここで「名も無き手」(Anonymous hand)と卑下しながらもイチジクの葉の繁る前の五月のある午後を読者に伝えようとする。あてどなく(idle)漂う船の姿はまるで空に浮かんでいるようであり、町は水を刷いた絹のスクリーンの上に投げられたように赤らんでとけそうに海に滑り込んで行く。丘のふもとでブラブラ遊んでいる少年はセミを捕まえ、笑いながらそれを妹のマントの中に閉じ込める。暖かな布の重なりの中で愚かな生き物は鳴く。

Shape of boats, body of a young girl, cicada,

Conspire and join each other here,

In twelve sad lines against the dark. ⁽¹¹⁾

船の形、幼い娘の体、セミは

ここ悲しい十二の詩行の中で

共謀し、互いに仲間となって暗闇に拮抗する。

暗闇とは、忘却、死、有限のことであろう。この僅か十二行に詩人は三つのものの鮮明な記憶を封じ込めて、回想・生・無限に連なるものを見出そうとするのである。それらはロドスの明るい陽光のもと、詩人に永生を信じる希望を失わせない有意なシンボルであった。二つの動詞 *conspire and join* を命令文ととれば、詩人の願望はいよいよ強く明確なものとなるのである。

第四の詩‘At Rhodes’はそれより遥かに理屈っぽく、その理屈が空転して晦渋である。三行五連の間に四行二連が入りこむ比較的定型に見える整い方だが、その内容は議論のための議論と思われる。「存在の十全さは対象の限界を設定することによる洗練にあるのではなく、丸さに、すなわち実在を受容することにある」という連がある。また「ローマ人は我々の陽のあたる情熱を、我々の価値の褪せることのない共和国の色を理解しなかった」というスタンザがある。‘We, Greeks’という表現がありローマ人と対比していることから、これらの議論のための議論は、おそらくクレオポラスの庭でダレルを慕って集まったギリシア人の仲間の談論風発を記録したものではあるまいか。

Philosophy with us was not worked out.
We used experience up. The rest precipitated.
Soon we were still alive : but nothing else was left. ⁽¹²⁾

哲学は我々にあっては成就されなかった。

我々は経験を使い尽くした。残りは真つ逆様の墜落だ。

そのうちに我々はまだ生きていた。しかし他には何も残らなかった。

ダレルもまたギリシア人と同化して議論の渦の中にはまり込んでいる様子が彷彿とする。ヘレニズムの真髓に触れる思いもするが、ギリシアの誇りであるはずの哲学も、庭園に集う二十世紀のギリシア人たちの言葉には、語るに落ちた、の感がなくもない。ここには皮肉なダレルの眼がある。というよりも、ダレルの仲間たちの一途な語らいの活写とみるべきであろうと思う。

次の“The Anecdotes”第十二詩篇‘In Rhodes’は、再び理解し易い僅か6行の短詩である。恐らく愛する人の髪、そして自らギリシアで摘みとり味わったブドウで窓ガラスのように青く染まった唇。これを詩人はしみじみと眺め、こうしてこの土地に馴染んだ自分たちを思う。椅子に座って夾竹桃のメンバーとなったのはつい昨日のことに思われるが、詩人は早くもこの土地の霊の息吹をしっかりと吸い込んでいた。

最後にくる第十五詩篇‘In Rhodes’は、4行、7行、11行、14行の4連をもつ最も晦渋な詩である。知性が与える粗雑な名称の中から、詩人は一つ二つを分類し、それを解放し、消えるがままにしようと望む。その思念のなかにはギリシア悲劇に登場する人物や獣の名が現れる。例えば「エレクトラの母」、エウリピデスの「イオン」、「クレウサ」。いずれも運命に翻弄されて破滅した悲劇のヒロインである。彼女たちの淫靡な寝床には樟脳や麝香の匂いが付きまとい、その色はアクタイオンをかみ殺したマスティフ犬の局所のようにピンクである。その後イメージは一気に地球規模となる。この地球の巨大な腹に句読点のように打たれた種子。あるものは木々となり、またあるものは木のように歩く人間となる。人間の思念は胚種のかたまりを「時」に提供する。ここに空間の広がり三次元となり抽象の世界に繋がって行く。第四連で「彼らは去り、彼らはやって来た。」しかし我々はその去り行く気配も聞かず彼らの到来を待つ準備もできていない。“They”は歴史の、時の系列に生起する生き物のことであろうか。いやそうではなくて、前の連の最後にある日常の些事、例えばキス、握手、涙のようなものかも知れない。人は自分が無力であるのを見て微笑むにちがいない。真実の道を離れ人生の局面を擦り減らすことによって育んだより大きな虚構の中で。こんな表現にも、読者は詩人の心の中に少しずつ形をとって来た *Justine* との関連を覗き見る思いがする。

We no longer haunted the street
Of our native city, guilty as a popular singer,

Clad in the fur of some wild animal. ⁽¹³⁾

我々はもはや野獣の毛皮に身を包む
ポップ歌手のようにうしろめたく
故郷の都市の街路に付きまとうことはない。

D.H.ロレンスの自伝的ヒーロー、Paulのように、また30歳を迎えたD.トマスのように、ダレルは一人前の人間として、また作家として後ろ髪を振り切って未来に向かっての大きな一歩を踏み出す覚悟をこの晦渋な詩に託しているのである。

ロドスに関する詩群の最後に“Aphrodite”を取り上げたい。1966年に出版された詩集 *The Ikons* の中の1篇であるが、このときダレルはすでに54歳、ギリシア世界との深い繋がりは、青春時代のコルフとその後アレクサンドリア体験を挟んでのロドス在住によってますます強められ複雑に織りなされた蜘蛛の巣のようなものであった。

Not from some silent sea she rose
In her great valve of nacre
But from such a one — O sea
Scourged with iron cables! O sea,
Boiling with salt froths to curds,
Carded like wool on the moon's spindles,
Time-scarred, bitter, simmering prophet.
On some such night of storm and labour
Was hoisted trembling into our history —
Wide with panic the great eyes staring...
Of man's own wish this speaking loveliness,
On man's wish this deathless petrifact. ⁽¹⁴⁾

真珠貝の大きな殻の中で
彼女が立ち上がるのは沈黙の海からではない。
それはこんな海からなのだ — おお海よ、
鉄の太索で苦しめられる海！おお海よ、
塩の泡で沸き立つ凝乳となり
月の心棒の上で羊毛のように毛羽立てられ
時の傷跡を付けられ、苦々しく怒りを抑制している予言者。
このような嵐と労苦の夜に

我々の歴史にまで震えながら持ち上げられ
大きな両眼は恐怖で見開かれ見据えている……
人間自身の願望のこの語りかける愛しさを、
人間自身の願望のこの不死の石化作用を。

ダレルはこの詩を現在ロドス市考古学博物館に収められているアフロディテの像に捧げた。博物館の建物は1440年から1489年にかけてヨハネ騎士団によって建てられた病院で、それ自身歴史的な由緒を持つものだが、展示品の中でも名高いのは長い髪を両手に持ち片ひぎをついて前方を見つめているアフロディテ像である。ダレルが深く知るようになり深く愛するようになったロドスのシンボルとして、侵食する海によって長らく愛撫されてきた大理石の彫像である。特にこの詩の最後の結語は、不透明ではあるが湯浴みするアフロディテが偉大なる中世都市ロドスの周りの海から蘇って、かけがえの無い人間の願望の大切さを、人間再生の精髓を訴えかけているというのであろう。

ダレルはこの島を去って39年後に再びアフロディテとロドスに愛情こもる回顧の眼を注いでいる。それは1978年に出版された *Islands of Greece* で、金儲けのために企てられた粗末な作品とされてはいるが、ギリシアの魅惑を余すところ無く描いたエッセイと写真によるガイドブックで、島狂いの病がダレルを掴んで放さなかったことの一つの例証であった。

3. Reflections of a Marine Venus

この作品はダレルがロドスを去って6年後（1953年）に出版されているが、その内容は‘A Composition to the Landscape of Rhodes’ という副題にある通り、まさしくロドスの歴史と風景と人々の生活とダレルの愛着に捧げられていて余すところが無い。ダレルはこの書の冒頭で *islomania*（島狂い）のことを「今自分は島にいるのだ、海に囲まれた小宇宙にいるのだと思っただけで、得もいわれぬ陶酔感にひたってしまう人たちのことだ」と定義し、これを言い出した友人の医師ギデオンはじめクレオポラス荘に集う仲間たちは皆言わず語らずのうちに自分たちが島狂いであることを認めたのである。ダレルはこの書の意図を“Anatomy of *islomania*”⁽¹⁵⁾ だと言い、「一貫性もなくまとまりもない形式上の欠陥をもつ」と謙遜しながら、これを「ギリシアの島、ロドス島に鎮座する女神に献呈すべきもの」としている。またもしできるなら事あるごとにその幻影が立ち上って私を苦しめるあの黄金の年月のある部分を思い出したい」とも述べている⁽¹⁶⁾。「あの黄金の年月」とはダレルがロドスで過ごした2年間でもあり「一日一日がまるで熟した果物が木から静かにすべるように落ちる日々」でもあった。そんな日々が集まって、ロドスの歴史は作られた。クレオポラス（紀元前6世紀のロドス島の僭主）の時代、ティベリウスの時代、十字軍の時代と受け継がれて来たのである。

庭園に集う友人の一人ミルズの願いに応えて、ダレルは「歴史や神話でなく風景というか、雰囲気というか……そして荒廃から正常にいたる過渡期であるこの奇妙な数ヶ月」⁽¹⁶⁾をこの一書にこめた。

ダレルたちの面前に海のヴィーナスが海の泡から生まれたごとく太陽の光の下に引き出されたとき、像は何世紀にもわたって触れた海水のためはっきりした輪郭が失われ、柔らかで戸惑いを覚えるような典雅な美しさを具えていた。両手で有り余る長い髪を支え、上体を傾けて片ひざついた蠟人形のような大理石像は、漁師の網に引き上げられたとき海草がからまり視力を失った白い穏やかな顔の周りには銀貨のような小魚が二、三匹飛び跳ねていたという。今、その像は内に潜む生命をひたと見つめ、表情を引き締めて時の力に思いを凝らしながら、島の考古学博物館に鎮座している。

... we shall not be free from her ; it is as if our thoughts must be forever strained by some of her own dark illumination... Behind and through her the whole idea of Greece glows sadly, like some broken capital, like the shattered pieces of a graceful jar, like the torso of a statue to hope. ⁽¹⁷⁾

我々は彼女から自由にはなれない。まるで私たちの想念が彼女の暗い情熱の照射の幾分かを永久に受けなければならないかのようだ。……都市の廃墟、典雅な壺のかけら、希望する像のトルソーのように、ヴィーナスの背後に、内部からギリシアの理念のすべてが悲しげに光を放つ。

この島に住み着き仕事にいそむうちに、その土地の出来事は時の流れの中に雲散霧消し、さりげない人々の話し振りや慣習のなかに息づいていることをダレルは知る。この書の巻末に付けたロドス島の花と祭の暦や民間療法の収録に、読者はそんなダレルのつつましい同化の姿勢を見て取ることができる。

しかしこの島には、時の経過によって風化したとはいえ、太古から連綿と連なる壮大な歴史があった。情報官の仕事の傍ら、ダレルはギデオンとともに考古学に関する蔵書にあたる機会を得、その結果をこの書の大部分に表明した。壮大な島の伝説・歴史と瑣末な人々の暮らしとが混然一体となったこの手引きの成り立ちは実に見事で、読者は飽きることなく巨視的から微視的へと視線を変えて興味深く読み進むことができる。それによれば、この島を主宰する神は太陽神ヘリオスであった。ゼウスが地上の国々を神々に分配しているときヘリオスは不在だったため、新しく出現しつつあったこの島をようやく与えられた。ヘリオスの孫の3人の英雄たち（リンドス、イアリソス、カミロス）の名を冠した古代三大都市は害虫の大量発生と大地震のため壊滅し、三都市の同盟は第四の都市ロドスを創設したという⁽¹⁹⁾。

「第四章、太陽神の巨像」でダレルは B.C.305のデメトリオスによるロドス攻略を何ページ

も使って活写し、和議を容れたロドスのためにデメトリオスが攻囲戦の記念として太陽神の巨像の建立を依頼したことを述べる。56年ののち大地震によって崩壊したこの巨像は、その大きさ、美しさによって中世にいたって伝説的な評判を獲得したが、この話は戦争から平和が生まれたこと、ロドス島民が古からいかに海外諸国の敬愛を集めていたかの証左となる。

「第六章、消滅した三つの都市」でダレルは言う。

The function of history in all this is a small but precise one: as in some renaissance painting where the hermit occupies the foreground, ...his only window gives on to a limitless panorama of smiling country, exact and glittering in its perspectives, symbol of the enamel landscape on which he has turned his back.⁽²⁰⁾

この本における歴史の役割は小さいけれど正確である。歴史は隠者が前面に座っているルネッサンス絵画のように……その窓は正確できらめく遠近法で描かれた微笑をたたえる外界の無限の全形を写しており、隠者が背を向けてきた光沢ある風景のシンボルとなる。

こうしてダレルは、カミロス遺跡の草を、リンドスの岩に打ち寄せる光の波を読者の前に彷彿とさせたいと願い、ある夏の午後友と計画してこれらの古代都市を訪れることを企てる。かつてイアリソスの都市があったフィレリモス山では、ドイツ軍による被爆で破壊された修道院や飛行場が無残な姿を曝す。2004年現在では修復されていたが、あたりが蟬の声の氾濫であるという情景は同じであった。円形劇場に気高く立つ松に吹く風はかすかに歌い、濃密な光が見晴るかす遺跡に満ちるカミロス。「博物館の壺のもつ静けさに満ちているカミロス」に対して「装飾のもつ甘美な雰囲気をもち、顫動しながら青空をわたって行く音色のようなリンドス。」⁽²¹⁾しかしそのリンドスに近づく道でも、轟く海は長々と続く砂浜に砕け、そこには横一列になった小さな人影が地雷除去作業をしているのであった（もちろん現在ではそこを埋め尽くすのは海水浴客のビーチパラソルである）。ロドスでの無二の親友ギデオンはその後無残にもニシロス島の地雷原で命を失ったのである⁽²²⁾。

学会随一のダレル研究者であるイアン・マクニヴン氏はいう。「『海のヴィーナス』を書いている間、ラリーは葛藤する気分が苛まれていた。彼はロドスにイヴという幸せであったが、ギリシア、ヨーロッパ世界のためにペシミズムに満ちていたのだ。」⁽²³⁾ダレルはこの書物を通して、かつて彼が知っていた古いギリシアを模索していた。そして彼はそこに皆の目からは隠れた、決して変わることはないギリシアがそこにあることに気づく。ダレルは過去の鏡の中に現在を見る。ロドスは無数の断片となって散らばっている、再編されるのを待ちながら。ダレルはこの島で創られ、生き、破滅した人生を、また彼自身がこの島で友人たちと、愛する人と生きた人生をこの書の中に定着した。ヨーロッパの良心なるものの悲劇が繰り返される只中に生きつつ、ダレルの想念はこの島についての大きな弧を完成しようと方向を変える。そしてその

中心にはあやまたず海のヴィーナスがあり、女神像の発見は内へ内へと掘り進んで、彼自身の内なる魂の再発見に繋がった。

…The clouds hang high over Anatolia. Other islands? Other futures?

Not, I think, after one has lived with the Marine Venus. The wound she gives one must carry to the world's end. ⁽²⁴⁾

雲が小アジアのアナトリアに高くかかっている。他の島々は？他の未来はどうなのだろう？海のヴィーナスと暮らした後では、そんなことは考えられない。女神が与えてくれた心の傷を、人は世界の果てまで引きずってゆかなくてはならない。

ロドスから離れて、作家ダレルは周りが海ばかりだった昔とは別なる夜を迎えるが、女神と彼女を取り巻く青い島の記憶に救われて、20世紀を代表する作家の一人として現代文学の道を歩み詰めるのである。

〔注〕

- (1) Cf. John Leatham, "Durrell on Rhodes", Lillios, Anna(ed), *Lawrence Durrell and the Greek World*, Cranbury, NJ, Associated University Presses, 2004, pp.145-150.
- (2) Cf. Lawrence Durrell, *Spirit of Place, Meaiterranean Writing*, London faber, 1988, pp. 78-79.
- (3) *Ibid.*, p. 79.
- (4) *Ibid.*
- (5) *Ibid.*
- (6) *Ibid.*, p.80.
- (7) *Ibid.*, p. 83.
- (8) *Ibid.*
- (9) Cf. Carol Pierce, "Lawrence Durrell", *DLB* 25, p. 91.
- (10) Lawrence Durrell, *Collected Poems 1931-1974*, London, Faber, 1957. p.175.
- (11) *Ibid.*
- (12) *Ibid.*, p. 205.
- (13) *Ibid.*, p. 212.
- (14) *Ibid.*, p. 255.
- (15) Lawrence Durrell, *Reflections on a Marine Venus*, London, Faber, p. 16.
- (16) *Ibid.*, p. 36.
- (17) *Ibid.*, p. 38.
- (18) *Ibid.*, p. 45.
- (19) *Ibid.*, p. 46.
- (20) *Ibid.*, p. 107.
- (21) *Ibid.*, p. 128.
- (22) *Ibid.*, p. 182.
- (23) Ian S. MacNiven, *Lawrence Durrell, a Biography*, London, Faber, 1998, p. 312.
- (24) Durrell, *op. cit.*, p. 184.

(かわの みちこ 英米学科)

2004年10月15日受理